

花高同窓会報



第105号

発行 平成25年2月28日

秋田県立花輪高等学校
同窓会事務局

〒018-5201 鹿角市花輪字明堂長根12

TEL0186-23-2126 FAX0186-23-2137

URL <http://www.ink.or.jp/~hanakoudousou/>

印刷 (有)大館孔版社



(水晶山スキー場)

甦れ！ 花高ウィンド・アンサンブル

第50回記念定期演奏会

•平成25年5月4日(土)午後2時開演

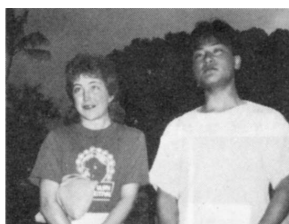
•於：花高体育館



ノースゲイト高校を指揮する小林先生



ハワイ・アラモアナショッピングセンターにて



ベストプレーヤーとしてチューバの葛西堅君(高39期)が選出。ハワイ大から20,000ドルの奨学金が授与された。

第1回環太平洋音楽祭 (S61.3.26~31・ハワイ) グランプリ受賞!!

縁の深い地になりました。50年ほど前のことですが、当時八幡平中学校の吹奏楽部を指導しておられた佐々木貞治先生が、能代の小学校でも私の担任であったご縁で、八幡平へ何度か遊びに行ったのが、鹿角の地を知る最初でした。当時、私も趣味でフルートを吹いておりまして、八中の吹奏楽

吹奏楽部第50回記念定期演奏会、おめでとうございます。私は、昭和53年から15年間にわたって花輪高校にお世話になりました。その間、他に替え難い貴重な体験をさせて頂きました。定年までの5年間を、警視庁音楽隊長として奉職できましたのも、花高での経験の賜物に他なりません。深く感謝申し上げます。また、地元の方々にもひとかたならぬお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

部の方々と一緒に演奏したことを覚えております。花高吹奏楽部は、佐藤修一先生をはじめとする歴代の先生方の偉大な指導力により、私が赴任する以前から、すでにその勇名を全国に馳せていました。他にどこにもない独特の柔らかな花高サウンドは、深く人の心に残る音色です。その他にしかないものは、宝物だと思います。現役の皆さんは、伝統の担い手として、是非頑張ってください。花高吹奏楽部に永久の栄光あれ。(前警視庁音楽隊長・東京)

特別寄稿

吹奏楽部第50回記念定期演奏会に寄せて

『花高サウンドは宝物』

元吹奏楽部顧問
小林久仁郎



親交のあった作曲家・故團伊玖磨氏の別荘の書斎にて

いつも応援有り難うございま
す。今年度も5月の同窓会本部
総会、8月の同窓会宮城支部総
会、10月の東京同窓会「花栄会」
総会にお招きをいただき参加を
させていただきました。いずれ
においても高

校時代を懐かし
しみ、ふるさ
とを懐かしみ
後輩達を応援
する熱いお心
に触れ合うこ
とがでまし
た。

東日本大震
災から2年が
経過しようと
しています。
私たちはこの
震災によって
実にたくさん
のことに気づ
かされたよう
に思います。
それらの多く
が日本の良さ、
東北の良さ、
秋田の良さ、
鹿角の良さ……つ
まりはふるさと
の良さではない
でしょうか。そ
して「人々の絆」
にたどりつくよ
うにも思われま
す。花輪高校の
生徒は優しく素
直で、まっすぐ
な眼差しをもつ



『立ちて世界にとよませむ』

学校長 一 関 雅 裕

若者です。この花高生こそが絆
をキーワードにした社会の再構
築を担う人材であることを疑い
ません。この花高生こそが地域
を支え、秋田を支え、日本を支
える人材であることを疑いま
せん。私は花高生にいつも呼
びかけます……「君たちこそ
が希望の光」。

青垣山をめぐらせる
なぐはしの国

国のみほろば
われらの花輪

われら花輪の 伴の緒ら
いまぞ呼ばはむ 新田に
立ちて世界に

とよませむ

(花輪高校校歌 一番)
世界に通用する資質を持つ
花高生であります。応援よろ
しくお願いいたします。



OB・OG合同練習風景

『第50回記念定期演奏会の開催』

吹奏楽部顧問 阿部慎太郎

花輪高校吹奏楽部の定期演奏会
の開催が来年度、50回を迎えます。
それを記念し、次年度の定期演奏
会は、第2部にOB・OGの皆様
との合同ステージを設けました。
既に3度の練習を終え、本番に向
けて着々と準備をしているところ
でございます。

昭和44年の初出場から、平成4
年までの間に打ち立てられた、
「全日本吹奏楽コンクール全国大
会出場20回」という記録は、全国
的に見ても非常に優れたものです。
現在私たちは、先輩方の残してく
れた伝統の支えのおかげで、充実
した活動をさせていただいており
ます。今回の定期演奏会をきつか
けに、先輩方の偉業を再認識し、
花輪高校吹奏楽部として誇りを持っ
て日々の活動に取り組むことが、
今の私たちに出来る唯一の感謝の
気持ちを表す方法だと思います。
記念定期演奏会は、平成25年5
月4日(土)14:00開演予定でござ
います。場所は、本校体育館です。
同窓生の皆様、是非足をお運びく
ださい。

『定期演奏会五十回に思うこと』

木次合葉子 (高33期)

定期演奏会の思い出はいろいろ
ありますが、何よりも自分たちで
手作りした演奏会ということです。
演奏だけでなく、広告取りやプロ
グラムの作成、会場準備などを経
験したからこそ、お客さんがたく
さん入ってくれたときのうれしさ
を感じる事ができたのだらうと思
います。

『半世紀の響演』

OB・OG合同ステージ事務局
高杉 正 (高41期)

五十回の定演はこれまでの諸先
生方、生徒のみなさんの頑張りが
つないでくれたものだと思います。
私がやってきた頃と今とでは状況
が違いますが、これからも回を重
ねてくれれば、昔の先輩たちの思
いもずっとつながっていくことと
思います。

花輪高校の吹奏楽部が創部して
半世紀を超え、また、代々の先輩
たちが続けてきた定期演奏会も今
回50回を数えるというのは、一人
のOBとして誠に誇らしい気持ち
でいっぱいです。今回の現役生と
OB・OGの合同ステージは、現在
OB会が存在しない我が高吹奏楽
部にとっては実現へ向けてのハ
ドルが高く、企画募集しても、O
B・OGがそんなに集まらないので
はないかと危惧していました。し
かし、現顧問の阿部慎太郎先生の
お声掛けと地元一般吹奏楽団の代
表を務める葛西氏の尽力で、50名
を超えるOB・OGのエントリーを
いただくことができました。昨年
末の顔合わせでは現役生と一緒に
楽しく演奏することができ、本番
当日の演奏も期待できそうです。こ
れを機にOB・OGが学校及び現役の
部員のためにかかわりを持つ場
を作っていくとと考えています。

『第50回記念定期演奏会に寄せて』

西村 美里 (高60期)

「またこのメンバーで演奏した
いね」そんな言葉をかけ合いな
がら迎えた卒業の日から早5年が
経ちます。当時は、就職・進学で

「故郷を懐かしむ場として」

同窓会事務局 木村成治 (高41期)

大先輩方が集う会場に戸惑いや不
安を抱えながら足を運びましたが、
故郷を懐かしむ場として必要だと感
じるのに時間はかかりませんでした。
早々、本校の話題や鹿角の昔話で盛
り上がりました。そして、室生犀星
(むろぎせいせい)の詩の一節「ふる
さは遠きにありて思ふもの」を連
想しました。各々の事情で故郷を離れ
ているのですが、故郷鹿角は誰
にでも特別なものだと感じました。
十月十三日に東京の茗花会館で同
窓会関東支部「花栄会」総会が行
われました。ゲストとして予定してい
た本校同窓生であり、数学教師とし
て教鞭をとられていた齋藤吉先生の
急逝されたことも故郷への思いが
深まった要因の一つだと感じました。
心より「冥福をお祈りいたします」。
結びに、同窓会に携わるすべての
同窓生に感謝しつつ、盛会を祈願い
たします。

卒業企画
旅立つ君たちへー
海外在住者からの
メッセージ

『若者よ思いやりの心を』

アメリカ 多恵子マコーミック (高23期)

これから自分という人間を磨き夢に向かって歩み始めるのですね。責任ある、そして自分に合った選択をして下さい。一つ一つの選択がユニークで世界に一人しかいない自分の人生を作ります。人生は種々予期せぬ事も待っています。それゆえに、いつも夢と希望、そして信念を持って思いやりの心を忘れず前進して下さい。

自分の今があるのは沢山の友達(家族、友人、先生)に支えられた事を忘れず、感謝の気持ちをもつを持ち、人の痛みも分かる人間になりますよう願っております。何処にいても人との繋がりが、そして思いやりが人の心を平安にし、意味ある人生を過ごせる事は確実です。

世界は本当に狭くなりました。世界の経済が日本の経済を、又世界の政治的変動が日本や他国に与える影響も避けて通る事の出来ない現状です。日本の宝であり、日本の将来であります皆様には、日本という国を世界に目を向ける事によって本当に知る事となるでしょう。

今、振り返って自分の人生をみると、いつも回りの人達に支えられてきました。国境を越えて得た沢山の友達の繋がりを大切にしています。思いやりは世界の共通語

であり、人を、そして世界を動かすのですから。若者よ、思いやりの心を胸に羽ばたけ!

『日本人を知るために』

ブラジル 吉田 尚則 (高11期)

「人間到る処青山あり」遙か青年時代、古い詩の一節を服ようながらブラジルに渡って、もう半世紀になろうとしています。

海外移住して得たことは、別段ありません。あえて言えば、異郷に身を置いたせいで日本人が幾分よく見えてくることでしょうか。話す言語も習俗も価値観も違う外国人に混じってしばらく暮らしていると、日本人の持つ優れた資質を異民族と対比し強く感じる反面、視野の狭さとかやや退嬰的な精神性といったネガティブな面も透けるようにみえてきます。

内向的と評される昨今の若者ですが、洋々と可能性に満ちた長い時間が前途にはあります。そのほんのひと時を海外で過ごし、自分や仲間たちのこと、そして祖国日本のことに思いを巡らせてみてはどうでしょうか。資産価値の極めて大きな「青春の一事業」となるはずです。

『自分の可能性を信じて突き進め』

マライイ共和国 秋本 啓太 (高54期)

私は現在、青年海外協力隊員としてアフリカ南部に位置するマライイ共和国のドマシ教員養成大学で体育教員をしています。将来体育教師になる人たちが、現職で教師をしている人たちに対して体育を教え、マライイにおける学校体

育の重要性についての認識を高めることが私の役割となっております。その要請に応えるべく、通常授業の他、朝5時からの朝練習と授業後の部活動を起し上げ、スポーツそのものを「楽しむ」をキーワードに、生徒と一緒に様々なスポーツを行っていきます。

ところでみなさんには思い描く将来がありますか? 「夢」というような大きなものでなくてもいいです。ただし、具体的なものは、高校入学当初持っていました。自分の将来が全く思い描けず、自分の将来をしっかりと見据えてそれに向かって努力している友だちが、随分と大人に見えたものです。しかし、こんな私でも熱中するものがありました。陸上競技です。当初は砲丸投げを専門にしていました。しかし、その競技レベルと言えば県大会入賞がやっとのレベル。陸上競技で将来を思い描くのは当時の私にとつとてとても難しいものでした。しかしある日、陸上の監督がこんな言葉をくれたのです。「お前は日本一になるかもしれない。可能性は大変高い。だが、あくまでも可能性。なつて初めて笑える。」この言葉をもつた当時の自分は、随分と困惑したものです。身体も特別大きくない、県大会入賞がやっとのレベルの自分に、何を根拠にそんなことが言えるのかと。肝心の当の本人が自分の可能性を信じられていなかったのです。しかし、こんな自分こそという事実は、勝手に自分の可能性を制限していた自分がいることを気付かせてくれ、結局はこの言葉がきっかけで次第に日本

一を目標に掲げるようになってきました。そうして、高校二年生のインターハイで7位入賞、高校三年生のインターハイで3位入賞し、もつと自分の競技者としての可能性にチャレンジしたいという気持ちから筑波大学への進学を決めました。大学進学後は高校時代に負った腰椎椎間板ヘルニアの怪我がともあり、砲丸投げからより腰に負担の少ない円盤投げに専門種目を切り換え、競技の中に生活置いて円盤投げに没頭しました。大学卒業後は高校時代からの目標であった日本一(日本インカレ優勝)を果たすために同大学大学院修士課程に進学し、更なる研究とトレーニングを積んだ結果、幸いにも日本一になることができました。しかし今思うと、日本一を達成したこと以上に、目標を達成する過程で得たものの方がとても多かつたように思います。そして得たものが多かつたのは、やはりそれが全力で取組んだものだからこそなのだと感じています。その後、社会人経験をを経て、今マライイで体育教師をしているわけですが、これはこれまで陸上を通じてお世話になった方々に対しての感謝の気持ちを何等かの形で社会還元したいと思い、私なりの考えで形にしたものです。私の人生にこれほどまでに大きな影響を与えたスポーツの良さを、スポーツ参加の機会が多く与えられない発展途上国においても伝えたいという気持ちで礎になつていきます。そして今に至るのですが、現実とは言え、厳しく高い壁が目前に立ちます。私にはまだこれからの活動も残すところ9ヶ月となりましたが、最後



の一つと数えられるほどの貧しい国。初等教育が無償化になって15年以上が経つた今でも、畑仕事の手伝いをしなければならぬ等の理由で学校に来ることができない子どもたちが大勢います。シラバス上では行われることになっていく体育の授業も、ほとんどの中等教育学校では行われていません。マライイの教育科学省レベルにおいて体育の重要性は次第に理解され始められているものの、まだまだ現場には反映されていません。私一人が体育の重要性を説いたところで大きな変化は期待できない状態にあります。しかし、目の前の生徒を改善する方向に変えられないかと言ったらそれは別です。これまでの自分の固定観念を捨てて、自分も一緒に変わろうとする勇氣さえあれば変えられる手応えを、活動が始まって1年と3ヶ月経つた今、ようやく掴み始めています。彼らにとっては教育者としての一つのモデルになる私の活動だからこそ、いつも全力で取り組む必要があり、それが将来教壇に立つ彼らにとって必ず役立つものになると信じています。私の活動はまだまだこれからが勝負どころです。私のここでの活動も残すところ9ヶ月となりましたが、最後

まで全力で突き進むつもりでいます。

花高のみなさんには、自分の可能性を信じて大きな将来を思い描き、自分にうんと言えるところまで全力でとことん突き進んでもらいたいと思っています。可能性は無限ですが、それを活かすも殺すも自分次第です。みなさんの今後の可能性に期待しています。

『チャンスを探して』

Let's do it!

ベトナム 戸澤 薫(高45期)

私は、高校時代にテレビで海外ボランティアの特集番組を見て、海外で看護師として活躍したいと思ったのがきっかけでした。花輪高校卒業後、都内の看護学校に入学、付属の大病院で七年間働いたあと海外に出るようになりまし

た。救命救急センターに勤務していた時に海外ボランティアに参加する機会を得たのです。それは二〇〇三年のイラク戦争の時、ヨルダンの難民キャンプで医療援助をすることでした。その活動中、自分の語学不足と視野の狭さを実感したこと、また、出会った海外の医療従事者に影響されて渡米しアメリカの看護師免許を取得しました。その後、縁あって二〇一〇年よりベトナム、ハノイのインターナショナルクリニックで日本人看護師として勤務し、引き続きハノイに在住しております。

高校時代の英語の成績は良くはありませんでしたが、洋楽を聞いて歌詞を覚えたり米軍ラジオ番組を聞いたりしていました。本格的に英語を勉強し始めたのは働くようになってからです。海外旅行を

通して視野が広がり、多くの人と英語でコミュニケーションできるようにになりたいと語学学校に通って学びました。

私が今言えることは、様々なことに興味をもって情報収集して自分の可能性を模索して行動にうつすこと。簡単に言えば、なんでもトライしてみるのだと思います。海外で生活するうえで不可欠なのは語学力ですが、自分が今もっているものを生かせる場所を探すことも大切です。私の場合は看護師という資格を生かせる場所を海外で見つけたのがきっかけでした。そのきっかけをくれたのは、ボランティアという機会でした。一度海外に出ると将来の可能性が広がると思えます。ぜひ機会を見つけて国際社会で活躍できるように応援しています。



スタッフと共に (左端)

お知らせ

平成25年度総会

日時：H25・5・18(土)PM6~

場所：茅 茹 荘

会費：3,000円

(連絡先)0186(23)2126

花輪高校 担当・木村まで

報告

大健闘の全国

高校駅伝大会

京都 坂本 信雄(高14期)

師走も押し迫った12月23日、京都市の西京極陸上競技場で行われた大会は、男子が一時、3区で8位につけるなど、小板橋兄弟の活躍が目立ったが、後半、粘りきれずアンカーは19位でゴール。かつてない好成績に花輪高校の飛躍ぶりが目立った大会でした。また女子は1区、2区から苦しい展開になったが、アンカーの阿部さんが3人をかわしたこともあって28位。年明け1月13日には全国女子駅伝大会が同じ競技場で開催されますが、多分、花輪高校からも複数の選手が参加することでしょう。この大会には花輪高校を母校とする社会人の参加も見込まれますので、ここ数年、花輪高校の存在が目立つばかりです。



応援風景

写真は応援風景。地元、鹿角市からご父兄を中心に大勢かけつけてくれたほか、地元、関西同窓会と近畿秋田県人会、さらには東京の同窓会花栄会からも2名の応援にかけてくれました。もう一つの写真は前日、宿舎にて行われた激励会の模様です。

(関西支部長)



激励会の模様

一よろしく願ひします

第65期 学年幹事 (H24年度卒)

- A組 ○浅石 梨花 三ヶ田 拓樹
- B組 山崎 槇子 ○米村 竜太
- C組 木村 亮太 佐藤 莉央
- D組 柳沢 佳奈 湯澤 亮

○印は学年代表幹事

三森 吉次 (高11期) 副会長・花輪



『生涯の友として俳句』

活躍中の海沼志那子さんがいる。石川啄木の「鹿角の國を懐ふる歌」があり、現代語訳をして高校相談室に掲額している。是非一読してください。私は短歌ではなく、三代に俳句を始めた。十七文字で雄大な風景が読める事に魅力を感じたためです。「荒海や佐渡に横たふ天の川」芭蕉。

日本の伝統文化として、和歌・俳句・川柳がある。高校の古典の授業で万葉集を習ったとき、安倍仲麿が帰国を前に胸にこみ上げてくる望郷の思いを歌った「天の原 ふりさけ見れば 春日なる 三笠の山に 出でし月かも」が頭に浸み込んでしまった。我が子が小学生になり、百人一首競技かるたを始めたとき大いに役立つた。私の同級生に千葉県短歌界の理事として